

動物の毛皮を剥いで着るということ

——北ハンティの毛皮衣服着用の審美性と神聖性

大石侑香

<要旨>

本稿は、西シベリア・タイガ地帯に居住するハンティという民族集団の防寒機能以外の毛皮の選択理由を明らかにするために、毛皮衣服の装いに関する物質文化と精神文化の両面を描くことを目的とする。毛皮は人間の衣服素材として防寒機能に優れており、それを理由に北方民族らが毛皮を着用していると考えられてきた。しかし、西シベリアでは工場製の防寒着にとってかわらずに未だ毛皮衣服が選ばれている。人間が生きている他の動物を殺しその皮を剥いで着用するということには何らかの精神性が働いているとみなし、とくに動物の毛皮への審美性や神聖性に着目し、以下の三つの課題に関して、現地調査データをもとに具体例をあげながら考察していく：①生業複合と世帯内分業の事例をあげ、自然環境を最大限利用した生業活動の上に現在の毛皮衣服文化が成り立っていることを確認する、②毛質・毛色の多様な家畜トナカイの毛皮利用の事例をあげ、トナカイ毛皮に対する審美および毛皮になったトナカイと人との関係を明らかにする、③動物観と毛皮衣服に対する価値観の差異と一致を明らかにする。

結果として以下の三点が確認できた。ひとつ目に、生業活動と世帯内分業、地域的な毛皮の交換関係の中に毛皮衣服の作成活動が埋め込まれた形で行われていることが毛皮衣服着用の理由のひとつとなっていることを確認した。二つ目に、トナカイ毛皮衣服においては天然／人工の模様が際立つような強い白色と黒暗色のコントラストに審美性を見出していることが分かった。三つ目に、特定の動物の神聖性は毛皮になった後も連続していることを確認した。神聖であるが毛皮を利用したいという矛盾を緩和するように、特別神聖なクマやネコ、イヌの毛皮については、一部あるいは全部の利用を禁じて他の大部分の利用を許すという思考方法があった。

1 問題の所在と目的

1-1 はじめに

北西シベリアのネネツやハンティ、マンシ等の北方諸族は、他の北ユーラシアの諸民族に比べてより日常的に伝統的な衣服を着用している。とくに冬期は老若男女が毛皮の衣服を身に着けている。トナカイの毛皮の外套と腿まであるトナカイ毛皮のロング・ブーツ、さまざまな動物の襟や帽子をまとい、彫刻を施したトナカイの骨・角やビーズで装飾したベルトを巻き、トナカイ橇に乗って極寒の大地を駆ける。こうした光景は工場製の洋服が普及した現代でも西シベリアにおいては珍しいものではない。これらの毛皮衣類の多くは自給・自家消費であり、彼ら自身が動物を捕らえ、殺し、鞣し、縫製して衣服を作り、着用している。

極北地域において動物の毛皮は重要な衣服素材のひとつである。寒冷で毛皮獣が豊富な自然環境と狩猟や牧畜により毛皮が入手しやすいこと、そして防寒機能が優れているという二つの理由で、北方の諸民族によって毛皮が選ばれてきたと考えられてきた。しかし、防寒という機能面がこの寒冷な土地であまりにも理にかなった選択理由であるためか、それ以外に人々が主体的に毛皮を衣服素材として選択する理由が後景化してしまっている。

今日毛皮は世界中で流通し衣服として利用されている。しかし、自ら野生動物を狩猟したり家畜を殺したりしてそれらの毛皮を利用してきた人々が暮らす地域は、寒冷地に限られる。そこには衣服の素材として最も上質な毛皮動物たちが棲息するからである。そのため、北方諸族たちは防寒目的で毛皮を着用していると一般的に考えられてきた。例えば、人間と毛皮の歴史をネアンデルタール人から現代までの長いタイムスパンで描いた西村三郎は、次のように極寒地域と文明社会の人々の毛皮利用の違いを述べている。

（中略）極寒地方のように、すぐれた防寒機能を持つ衣服が不可欠な地域では、その後も毛皮がそれに最適の衣料として使われ続けてきたことは、事実である。だが、それ以外の地域と社会——いわゆる文明社会はほとんどここに含まれる——では、毛皮は衣服そのものというよりもシンボルないし装飾性の強い品目、それも前述したように権力や富貴を象徴し、豪華と絢爛を演出する小道具として、だが、それゆえにこそ多くの人々の欲望と羨望をかきたててやまない高価な商品へと、性格を大きく変貌させてゆくのだ [西村 2003: 46-47]。

確かに、極寒地域以外では防寒機能の重要性は希薄化する。しかし、だからといって、極寒地域の人々にとっての毛皮衣服の装飾性や象徴性が希薄化するわけではない。西村はこの点に関しては考察の対象外であった。そこで、本章ではあえて、本特集の序で指摘されている文化・社会的規範に則った身体上の表現としての装いに焦点を当てていきたい。実際に彼らの毛皮衣服には独自の審美性や価値観が反映されている。そして、そこには彼らの生業活動と世界観に基づく動物観が深く関わっている。本稿では、ハンティ等が防寒機能以外に主体的に毛皮を選び取る理由を明らかにすることによって、人間が他の動物の

毛皮を剥いで着るということの意味を問い直したい。

考察の対象とする事例は、2011年9月～2012年3月、2016年3月と9月に西シベリア、ハンティ・マンシ自治管区とヤマル・ネネツ自治管区において行った参与観察とインタビューを主とした文化人類学調査によるものである。

以下、まずハンティの毛皮衣服文化に関する先行研究を整理し、物質文化と精神文化の両面性に着目するという本稿の枠組みを示す。次に、北ハンティの毛皮利用の概要をまとめたうえで、生きた動物に対する動物観が毛皮になった以後もどのような形で継続し、人々の審美性と神聖性に影響を与えているのかについて考察していく。

1-2 ハンティの毛皮衣服文化に関する先行研究と本研究枠組み

ロシア民族学において、シベリア北方諸族の毛皮の衣服に関する研究は物質文化研究の中の衣服研究で扱われている。ハンティの服飾文化についての民族誌的研究は1950年代から行われ始め、その文献は膨大に存在する。ロシア民族学において毛皮衣服は物質文化研究の項目であり、そのほとんどは装飾の形状や模様・モチーフの記述と分類に傾注されている。例えば、シベリア諸族の装飾文化をはじめて網羅的に整理したものとしては、セルゲイ・イワノフ〔Иванов 1963〕の研究書がある。ここでは、北方諸族と極東諸族の衣服に縫い込まれるさまざまな装飾・模様に関する資料を収集して分類し、諸民族への伝播時期・経路を考察している。また、近年は地域的な調査報告も豊富であり、例えば本稿が対象とする北ハンティに関する研究では、ガリーナ・アクシャノヴァ〔Аксеноваほか 2005: 78-81〕が、スィニャ川周辺での現地調査に基づき、衣服形態を記述し地域的な特徴をまとめている。このような分類学的研究の蓄積により、データは豊かになり分類もより緻密なものとなってきた。

また以下のように、衣服の形状や装飾の分類に偏らない、興味深い視点を持った文献も多く存在するが、これらにおいても装うことに伴う精神文化や装う主体への関心は乏しい。例えば、アクサナ・ボゴルダイエヴァ〔Богордаева 2005〕は、衣服の製作技術に注目して現地調査を行い、ハンティを含む広範なオビ・ウゴルの衣装に関して博士論文を執筆した。ゾーヤ・ソコロヴァ〔Соколова 2009〕は、網羅的な文献調査から20世紀を中心としたハンティの服飾文化の変容に関して整理している。これらの近年のロシア民族学の研究においても、衣服はあくまで精神文化と対置する物質文化として扱われ、身近に存在する生きた動物を殺して、その毛皮を剥ぎ、装うということに伴う精神性についてはあまり議論されていない。そもそも動物の毛皮を特別な装いの素材として取り上げることはなく、衣服項目の一部として扱っている。

このように、管見の限りであるが、物質文化研究としての先行研究は豊富に存在するものの、毛皮で装う人々の独自の審美観や価値観に関してはあまり論じられておらず、毛皮衣服を選び取る主体性については考察の範囲外であった。本稿では、物質的側面からだけでは解けない、ハンティが現代の防寒機能に優れた工場製品ではなく毛皮衣服を選択する理由を明らかにするために、豊富な物質文化研究を踏まえつつ、生業を含めた物質文化と審美性や価値といった精神文化の両面から描くことを目指したい。

そこで、本稿はこの目的を達成するために、具体的に以下の三つの課題に関して具体例をあげながら考察していく：①生業暦と世帯内分業の事例をあげ、自然環境を最大限利用した生業活動の上に現在の毛皮衣服文化が成り立っていることを確かめたうえで、②毛質・毛色の多様な家畜トナカイの毛皮利用の事例をあげ、トナカイ毛皮に対する審美および毛皮になったトナカイと人との関係を明らかにする、③動物観と毛皮の衣服に対する価値観・態度・行為の連続性と非連続性を明らかにする。

2 環境に応じた北ハンティの毛皮利用と社会的背景による変化

2-1 北ハンティの概要

ハンティは主に西シベリアのオビ川中・下流域東岸とその支流域に居住する民族集団である。2010年のロシア国勢調査によれば、ハンティはロシア国内に約3万人おり、このうち都市部には約1.1万人、村落部には約1.9万人が居住している。村落部居住人口の中には個人経営あるいは企業経営で狩猟・漁撈・トナカイ牧畜を営んでいる者が含まれる。本稿が対象とするのは、村落部、すなわち村 село¹、集落 деревня、森 лесに住み（半定住か遊牧）、かつ狩猟・漁撈・牧畜活動に自らあるいは家族・親戚が従事するハンティ等である。

ハンティはフィン・ウゴル語派のウラル語族ウゴル語系に分類され、下位方言グループとしてさらに北ハンティ、東ハンティ、南ハンティに分けられる [Balzer 1999: 25] (図1)。それぞれのグループは周辺民族から言語的・文化的影響を強く受けており、とくに北ハンティは隣接して居住するネネツからトナカイ遊牧に関しての影響を大きく受けている²。

本稿は、それらの中でもとくに北ハンティの動物観と毛皮利用を対象とする。南ハンティと東ハンティの一部が漁撈と狩猟が主な生業であるのに対して、北ハンティはトナカイ牧畜にも従事しており、家畜トナカイの毛皮衣服と他の動物の毛皮衣服の比較を同じ社会的背景と自然環境条件下で行うことができると考えたからである。具体的な場所は、ハンティ・マンシ自治管区のヌムト湖周辺地域（以下、ヌムト）とヤマル・ネネツ自治管区のスィニャ川流域（以下、スィニャ）である。前者では個人経営のトナカイ牧畜世帯、後者では企業経営のトナカイ牧畜世帯と定住集落で暮らすかつて牧畜業や漁業に従事していた年金生活者から主に聞き取りを行った。

1 ロシア語はキリル文字、ハンティ語はキリル文字転写して斜体で示した。

2 野生トナカイの家畜化が始まったのは紀元前一千年期であるが、ハンティがトナカイ牧畜を行うようになったのは意外にも遅く、数百年前からのことである。西シベリアには紀元前3～5世紀までハンティ、マンシ、セリクープ、ケートの祖先となる人々が、古代人同様に狩猟・採集・漁撈を行い居住していた。紀元前1世紀あるいはそれ以前に彼らはより南方のアルタイ山脈・サヤン山脈・カザフのステップから移動してきたウラル語・ウゴル語等を話し遊牧を行う種族たちと交わっていくつかの集団ができた。そしてこれらの集団のひとつが現在のハンティを形成した [ソコロフ 1987: 36-37]。15世紀頃からハンティはより北方のツンドラに居住し大規模なトナカイ牧畜を行うネネツの影響を受けてトナカイ飼育を始めた [Prokof'yeva ほか 1964: 521]。ソ連時代に集団化が行われるまでハンティは、数世帯からなる大家族ごとに、川沿いなどの自然の境界で区切られた世襲の狩猟・漁撈領域を、陸上と水中の獲物を追いつつ、家畜とともに季節移動しながら暮らしていた [山田 2007: 206]。



(凡例：- - - - -管区境界線、.....ハンティ居住地)

図1 ハンティの居住地域と調査対象地 出典：筆者作成

2-2 毛皮利用の対象とその機能と装飾性

自然環境や社会的背景によって牧畜か狩猟か漁撈か、どの生業活動が重要かは異なる。それに応じて、自然から得られる衣服の素材も異なってきた。つまり、トナカイ牧畜に大きく依存する生業複合の場合はトナカイ毛皮、狩猟の場合は森林の毛皮獣の毛皮、漁撈の場合は魚皮が衣服として特徴的に現れてきた。そしてこれに加えて、地域的自然環境の差異により生息する毛皮動物もさまざまであり、利用できる身近な野生動物の毛皮も異なってくる。もちろん交換・交易を行い、自ら生産しない衣服素材を入手することもある。例えば、漁撈が主たる生業だとしても、トナカイ牧畜を営む人々と魚とトナカイ毛皮・肉との交換が行われ、トナカイを所有していなくとも立派なトナカイ毛皮の衣服や敷物を所有しているということは珍しくない³。

そこでまず、トナカイ牧畜、漁撈、狩猟採集を複合した生業を営む北ハンティのところで利用されている主な毛皮動物とその利用方法の例を表1に示す。ハンティ語の動物名は分類学における種名にほぼ対応している。

3 筆者が2016年9月に行ったスイニヤでの聞き取りによる。漁撈を中心とした生業を営むある定住世帯は一年間に約1トンの魚を親戚の職業トナカイ牧夫に与え、代わりに肉や毛皮を必要に応じて入手していた。牧夫は自分たちが食べる以外にも牧犬の餌として魚が必要である。

表 1 主な毛皮利用対象動物

目	科	種（学名）	ハンティ語名	ロシア語名	和名	毛皮の利用法	毛皮の特徴・その他
<野生動物>							
食肉	Canidae	<i>Alopex lagopus</i>	лэлэк	песец	ホッキョクギツネ	帽子、襟	刺毛・綿毛が長く厚く密生。柔らかい毛質。
		<i>Vulpes vulpes</i>	охер	лиса	アカギツネ	帽子、襟	刺毛が長く、綿毛が密生。
	Mustelidae	<i>Gulo gulo</i>	һошэк	росамаха	クズリ	襟、縁取り	水を通さない。刺毛が硬く密生。
		<i>Lutra lutra</i>	онтар	выдра	カワウソ	帽子、頭巾、縁取り	水を通さない。刺毛が長く硬く、綿毛が細く柔らかく密生。
		<i>Mustela erminea</i>	сос	горноста́й	オコジヨ	襟、縁取り	毛が短く、柔らかい。冬毛が純白。
		<i>Mustela lutreola</i>	норка	норка	ミンク	襟、縁取り	柔らかい下毛が密生し、刺毛に光沢。
		<i>Mustela sibirica</i>	-	колонок	シベリアイタチ	襟、縁取り	毛が短く、綿毛が厚い。
		<i>Martes martes</i>	нѣхас рут еой	лесная куница	マツテン	襟、縁取り	毛はクロテンより短い。柔らかい毛質。
		<i>Martes zibellina</i>	нѣхас	соболь	クロテン	襟、縁取り	光沢のある毛が長く密生し柔らかい。
	Ursidae	<i>Ursus arctos</i>	улты ики	бу́рый медве́дь	ヒグマ	儀礼、櫓の牽引具	毛が長く、硬く、密生。皮が硬い。
	Leporidae	<i>Lepus timidus</i>	щөөр	заяц-беляк	ユキウサギ	襟、縁取り	毛が短く綿毛が厚く密生。刺毛が折れ易い。
齧歯	Muridae	<i>Ondatra zibethicus</i>	а́нтатр	ондатра	マスカラット	襟、縁取り	刺毛が長く光沢があり、尖鋭。綿毛が短く密生し、柔らかい。
偶蹄	Sciuridae	<i>Sciurus vulgaris</i>	лаңки	белка	キタリス	外套、土産物	毛が柔らかく緻密。毛皮が小さい。
	Cervidae	<i>Alces alces</i>	кура́н еой	лось	ヘラジカ	ブーツ	狩猟制限あり。
	Anatidae	<i>Cygnus bewickii</i>	хота́ң	малый лебедь	コハクチョウ	外套のライニング	白く柔らかい羽毛皮。狩猟制限あり。
<家畜>							
食肉	Canidae	<i>Canis lupus familiaris</i>	амп	собака (лайка)	イヌ（ライカ）	衣類	毛が密生しているが硬い。毛糸にもなる。
	Cervidae	<i>Rangifer tarandus</i>	е́ўди	се́верный оле́нь	トナカイ	衣類、ブーツ、敷物、天幕	刺毛が空洞状で中に脂肪が詰まっている。綿毛が厚く密生。毛皮が重い。
<養殖毛皮>							
食肉	Canidae	<i>Vulpes vulpes</i>	охер	чернобу́рка	ギンギツネ	襟	アカギツネの突然変異。一本の刺毛に白色と黒色が混在。刺毛が長く綿毛が短く密生。

出典：筆者作成。種名、毛皮の特徴に関しては、奥村 [2013]、近藤 [1998]、中村・西川 [1977] を参照した。ハンティ語名はシュルイシカル方言あるいはカズィム方言で記した。

現在では化繊綿入りの上着やダウンの上着等の保温性の高い工場製品も普及しているが、厳冬期には依然として表 1 のように、家畜トナカイの毛皮をはじめ、野生動物ではキツネ、カワウソ、テン、リス、ウサギ等の毛皮、ハクチョウの羽毛皮が好んで着用されている。その理由のひとつは、毛皮の構造⁴による機能的特質、すなわち保温力⁵、撥水性⁶、耐久性⁷、通気性、柔軟性、弾力性等が優れており、工場製品よりも寒冷な地域での生活に適しているからである⁸。装飾的特質に関しては、毛の独特な光沢と色のヴァリエーショ

4 一般図書『毛皮の本』[中村・西川 1977] は平易に毛皮に関する基礎知識を概要している。以下、毛皮の構造に関して筆者が短くまとめ直した。毛皮は皮と毛から成る。皮は表皮（上皮）、真皮、皮下結合組織から成る。皮下結合組織は皮を剥いたときについてくるものであり、脂肪分が多く、鞣しの過程で取り除かれる。真皮は毛を支えている部分であり、ここが鞣しの対象となる。毛は長い上毛（刺毛）とその下に生えている下毛（綿毛）、髭など特別に発達した剛毛（触毛）から成る。刺毛は強く弾力性に富み体を守る役割を担い、艶があって色彩にも富む。綿毛は刺毛と比べて柔らかく短く密生しており、体温の発散を防ぐ。この綿毛の密生度が高いものが高品質の毛皮とされる。密生していないと、刺毛が寝てしまい毛皮の保温性や美しさが損なわれるからである。ウシやウマはこの刺毛だけを持ち、メンヨウは綿毛だけを持つ [中村・西川 1977: 29-30]。

5 毛は熱の不良導体であり、また綿毛の一本一本の隙間にある暖かい空気が層をなしているため保温力が高い [中村・西川 1977: 30]。

6 刺毛が水をはじくため毛皮には撥水性がある [中村・西川 1977: 29]。

7 毛皮の耐久性については、肉食の水生動物の毛皮が最も高く、次に陸生の肉食動物、草食動物となっている [中村・西川 1977: 32]。最も耐久性の高い毛皮はオットセイやラッコの毛皮だが、表 1 の中では、カワウソの毛皮が最も耐久性に優れており、帽子や頭巾等に使用されている。カワウソの刺毛が剛毛すぎるときは刺毛を抜いたり刈ったりして綿毛の柔らかさを出して使用する。かわって、草食動物の毛皮は毛が折れたり切れたりしやすく、耐久性に劣る。

8 筆者自身も冬のシベリア調査では毛皮の衣服が非常に有用であることを実感した。筆者がダウンジャケットを着用してトナカイを探してマイナス 30 度の森の中を 5 時間ほど歩き回ったとき、自分の体から出た蒸気と汗がジャケット内に溜まり、その水分で羽毛がバキバキと凍ってずしりと重くなってしまった。ジャケットの表面までも霜が降りたように凍って白くなり、ひどく凍えた。防寒のつもりジャケットだったが、かえって冷えてしまった。それがトナカイの毛皮の衣服を借りて着たときは、汗をかいても凍らず、スノーモービルに乗っても風を通さず、毛皮に雪がついて固まってしまっても、たたけば雪を払うことができ、凍えることはなかった。

ンの豊かさがあげられる [中村・西川 1977: 30-31]。毛皮は動物によってその皮質・毛質が異なる。

こうした基本的な毛皮の機能や一般的な見た目の違いは、ハンティのあいだの毛皮利用にも活かされている。例えば、詳しくは後述するが、さまざまな家畜トナカイの個体の体色の装飾性を活かして、白いものと黒いものを縫い合わせて色のコントラストで模様を作ったり、個体の模様をそのまま活かしたりする (図2)。毛足が短く丈夫で雪が付にくいトナカイの足の毛皮を使用してロング・ブーツを作る (図3)。刺毛が長くて撥水性が高く、肌触りの良いキツネの毛皮は、帽子や襟に使用する (図4)。キツネより毛足が短く、綿毛が柔らかく刺毛の艶が良いイタチ科の動物は目立つ部分である襟やトリミング (縁取り) に使用する。薄くて弱い、柔らかくて軽く暖かいコハクチョウの羽毛皮はライニング (裏地) に使用する⁹。



図2 マーリツァ (左) とサフ (右)
出典：2011 年 12 月ヌムトにて筆者撮影。



図3 キツィ (トナカイ毛皮のブーツ)
出典：2011 年 11 月ヌムトにて筆者撮影。



図4 キツネの帽子と襟
出典：2012 年 2 月ヌムトにて筆者撮影。

9 コハクチョウの羽の部分は簀として使用する。肉は鳥類の中でもかなり美味とされる。しかし、調査当時 (2011 年) は年間一世帯当たり 10 羽までという狩猟規制が住民に認識されていた。



図5 箭打ち（鞣し工程）
出典：2011年11月ヌムトにて筆者撮影。



図6 マーリツァ（左）とサフ（右）
2012年2月ヌムトにて筆者撮影。

2-3 毛皮利用の変化と社会的背景

自然環境により利用可能な毛皮は異なるということを強調したが、社会的状況も毛皮の利用に深く関わっている。ソ連崩壊は、とくに衣服素材として世界的に流通していた野生動物の狩猟と毛皮衣服に対して少なからず影響を与えた。

現在、ハンティ等は野生動物の毛皮をほぼ自家消費しているが、ソヴィエト時代にはソフホーズ（集団農場）が彼ら北方諸族から毛皮を買い取ったり、ソフホーズ所有のトナカイと交換したりしていた。1960年代～1980年代にはファッションとしての毛皮衣類が世界的に流行し、外貨獲得のための重要な輸出品となっていたためである。シベリア諸族が狩猟を行って生産した毛皮はソフホーズを通して毛皮公団に集積され、国際市場で競売に掛けられて国外に輸出された [Союз Пушнина web site]。しかし、西欧で動物愛護運動が盛んになり毛皮の流行が衰退して国際需要が低下し、さらにペレストロイカ期に毛皮の流通が滞り、またソフホーズの運営がうまくいかなくなってくると、次第にソフホーズが北方諸族から毛皮を買い取ることもなくなっていった。世界各地の伝統的な衣服が観光客向けの商品となったり、西洋のファッションに取り入れられたりした結果、グローバルに流通し消費の形態が多様化していく傾向がある。それと対照的に、ハンティ等が狩猟で獲得した毛皮は国際市場にも国内市場にもほぼ流通しなくなり、毛皮衣服は依然として家庭内で作られ家庭内で消費されるにとどまっている。

こうした毛皮の商品価値の下落は生産者であるハンティ等の毛皮生産に対して影響を与えている。ソヴィエト時代には、集団化が行われ、ほぼ全員がソフホーズに所属して働いていた¹⁰。ハンティ等も、狩猟、トナカイ牧畜、漁撈等だけでなく、林業や農業、酪農業、養狐業、食品加工場の仕事に従事する者、獣医、教師として働く者もいた。狩猟を行うソフホーズでは、父親が狩猟ソフホーズに所属していたヌムトのネネツ女性（1970年代生まれ）によれば、ソヴィエト時代には狩猟計画が定められており、「リス 300 匹」というような年間の捕獲目標のリストが存在した。計画より多く狩ることも許されており、その分現金や物品が与えられた。彼女の父親は優秀なハンターで、何度も町や村で表彰さ

れてメダルや感謝状をもらい、モスクワに招待されたこともあった。

こうしたソフホーズの仕事とは別に世帯や個人で獲得した毛皮もソフホーズが受け取っていた。例えば、ソヴィエト時代に漁撈に従事し、そのかわり自宅周辺で狩猟も行っていたスイニャのハンティ男性（1960年代生まれ）によれば、スイニャ・ハンティを管轄していたムジ・ソフホーズでは、クズリの毛皮一枚と出産可能な雌トナカイや仔トナカイとの交換を行っていた¹¹。彼によれば、1960年代～1970年代にはオコジョの毛皮一枚が10ルーブルで買い取られていた。オオカミはトナカイを食べるので、毛皮として買い取られていただけでなく害獣対策としてもオオカミ狩りが推奨されていた。オコジョの他には、キタリス、ホッキョクキツネ等もよくソフホーズに渡していた。職業ハンターだけでなく年金生活者¹²も毛皮を売ることによって現金を得て生活の足しにしていた。例えば、スイニャの集落で生まれた女性（1970年代生まれ）の父親は職業ハンターではないが販売用の毛皮獲得のため11月～12月に一か月ほど森の奥で宿営してリスの毛皮を獲っていたほどだと言う。

このように安定した流通ルートがあったため、森や集落に暮らすハンティ等は積極的に毛皮獣の狩猟を行っていた。しかし、1980年代半ばになると上述した二つの理由でソフホーズは毛皮の買い取りを行わなくなってしまい、それに伴いハンティ等の毛皮衣服にも変化があった。スイニャのハンティ男性（1960年）は、毛皮を売ることができないため、森に何日も宿営して狩猟を行ったり、罠をたくさん仕掛けたりするほどには毛皮を必要以上には獲らなくなったと言う。また、「かつてはどこでも罠を仕掛けてよかった。どこでも動物は歩いていたので」（スイニャ・ハンティ男性、1960年代生まれ）と言うように、罠を仕掛ければ仕掛けた分だけ動物を獲得できるほど毛皮獣が多くいると考えられているが、80年代半ばには必要がなければ積極的に毛皮のための狩猟をしなくなった。

とくにソヴィエト時代はリスを大量にとってソフホーズに渡していたが、まったく獲らなくなってしまった。あるスイニャのハンティ女性（1970年代生まれ）は、「森でリスを見かけて、すぐに獲れそうなところにいる、（夫が）欲しいかと聞いたけれども、「何のために？」と思ってしまう」というように、リスを見かけたとしても欲しいと思わず、獲らないことの方が多い。また、リスは個体自体が小さいのでリス毛皮だけで外套を作るとな

10 ソヴィエト時代には、トナカイ飼育の場合では職業牧夫数名が計画経済に沿った食肉生産のために定められた場所で比較的大規模の群れで遊牧をしていた。狩猟や漁撈の場合でもあらかじめ割り当てられた場所に数か月間家族と住み込んで計画に沿って獲物を獲っていた。しかし、社会主義体制が崩壊すると、ヌムトのハンティ等はソフホーズでの労働を辞め、家族と家畜を連れて森でトナカイ飼育・漁撈・狩猟・採集を区別なく行う複合的生業を始める。その際に、数世帯がともに労働・宿営して遊動を行うのではなく、固定的家屋のあいだを季節的に移動し、世帯が個人経営として自立性の高い生業・生活を営み始めた [大石 2014]。かわって、スイニャのハンティはトナカイ飼育ならびに漁撈については旧ソフホーズが解体し民営化しても継続するが、狩猟部門は消滅した。現在は村居住者が増え、ソ連時代に生活の拠点であった川沿いに点在する集落には主に年金生活者が居住し、生業複合を営んでいる。

11 このようにして漁撈従事者であっても、トナカイを所有しトナカイ毛皮の衣服を所有することが可能であった。

12 トナカイ牧夫や漁夫は年金生活に入るのが都市生活者よりも早い。例えば、2016年には、スイニャではトナカイ牧畜に従事していた男性は45歳、女性は40歳で年金生活者になることができる。漁撈に従事していた男性は50歳、女性は45歳で年金生活者になることができる。年金だけでは不十分なので、まだ働くことが可能な人々はこのように森で自ら毛皮動物や魚を獲ってソフホーズに渡し生活の足しにしていた。

ると 200 ～ 300 匹分くらい必要になる。彼女は以前リスの毛皮の外套を持っていたこともあるが、たくさん毛皮が必要なうえ、たくさん縫わなければならないので作るのが容易でないといい、それをリスの毛皮を使用しなくなった理由としてあげていた。また、彼女に限らず、同様の理由でリス毛皮の外套を着用する者が減ったと言う。

このように、ソフホーズという流通ルートがなくなり、一部の毛皮の自給・自家消費傾向が強くなっていく一方で、余剰の毛皮を売って現金を得ようとすることや、親戚等との物々交換に使用することも頻繁に行われている。しかし、毛皮の販売・交換は通常個人あるいは世帯で行い、組織的に経済活動をする傾向はみられない。最も多いのは、都市部の市場で魚やベリー等の生産物のついでにトナカイ毛皮の小物やブーツを自ら販売したり、市場のロシア人の帽子屋に生皮を売ったりすることである¹³。また、都市部のロシア人や親戚に毛皮を売ってほしいと依頼されたり、村や都市部の博物館等に展示用の毛皮の天幕を売ったりすることもある。このような毛皮の販売口は現在でも細々とあるが、常に需要があるわけではないため、毛皮の販売は非常に不安定な収入であり、これだけで生計を立てる者はいない。

したがって、ハンティたちが生産する毛皮は世界的市場からは遠ざかり、反対に、家庭で生産され家庭で消費されるもの、あるいは限定された地域における交換財になったといえる。毛皮の世界的需要が減ったことにより、リス等の商品価値の低い毛皮動物の狩猟が行われなくなり、それらの毛皮を使用した衣服を所有・着用しなくなったという結果をもたらした。

3 生業活動に組み込まれた毛皮衣服作り

3-1 毛皮衣服作りと生業暦と分業

前章では、ハンティは多種類の毛皮を利用していることを確認したが、彼らはそれらをほとんど自給している。すなわち利用している毛皮は、家畜トナカイから得たものか、自ら狩猟で獲得したものか、あるいはトナカイ牧畜や狩猟を主な生業とする親戚等との贈与交換から得たものである。以下、そうして獲得した毛皮をどのように加工していくかを、複合生業と世帯内分業の中に位置づけながら説明する。

まず、鞣し作業に関してトナカイ毛皮を例に示す。トナカイ毛皮の衣服作りは、狩猟・屠畜—皮剥ぎ—乾燥（冬）—鞣し¹⁴（加油または燻し・箭打ち¹⁵または揉み込み）—色合

13 地域によって個人生産物の販売方法は異なるが、ヌムトから近い町の市場にはハンティ等北方諸民族用のスペースがあり、そこで生産物を売ることができる。また、筆者とインフォーマントのあるハンティが都市部の市場で民族衣装を着て歩いていると、毛皮の帽子屋が近づいてきて、カワウソの毛皮やキツネの毛皮を買いだめしたい旨を伝えてきたことがあった。毛皮の帽子屋に連絡先を渡しておいたり直接持ち込んだりして、鞣し前の生皮を買ってもらうこともあるそうだ。

14 鞣しとは、「動物の皮膚のコラーゲン繊維以外を除去し、さらに繊維間の空隙を媒材によって埋めて、組織全体を腐敗しにくく弾力を持った丈夫なものにする作業」[佐々木 1994: 180] のことである。剥いだままの生皮では腐ってしまうし、硬直してしまうため、鞣し作業が必要になる。鞣しの方法はタンニン鞣し、クロム鞣し、油鞣しなどさまざまだが、動物の種類や産地によって皮の状態が異なるため、それぞれに適した鞣しを行う。ハンティは媒材として魚油を使用している。

い大きさの組み合わせ—縫製という順で行われる。そして、この工程は年間の複合生業の中に組み込まれた形で行われている（表2）。

秋から冬にかけて野生動物を捕獲し、トナカイを屠畜する。春から秋まで飛来する渡り鳥の狩猟期間は限られるが、その他の毛皮動物に対しては年間をととして狩猟活動を行うことが可能である。しかし、冬毛への換毛後の毛皮をねらって秋～冬に狩猟をすることが多い¹⁶。狩猟方法は罾猟と飛道具を使用した狩りである。積極的に動物を探しに行くこともあるが、罾猟を仕掛けて獲ることの方が多い¹⁷。野生動物を捕獲し殺した後、トナカイを屠畜した後、すぐに毛皮を剥ぐ。剥いだ毛皮に魚油を塗り、冬季の外気温にさらされる屋外や小屋で乾燥させておくか、煙でいぶして乾燥させる。そして、日照時間が長くて作業しやすい春に皮下結合組織を除去し柔らかくするために、専用ナイフで筋打ち作業を行い（図5）、手でこすり合わせるようにして揉んでさらに柔らかくする。このとき鞣し作業以外にもトナカイの背の筋や足の筋を細く裂いて縺り合わせて毛皮縫製用の糸を作る作業も行う。鞣しに必要な魚油は夏季に豊富に獲得できる魚で作っておく¹⁸。冬季は生皮でも屋外や小屋に保管しておけば腐食しにくい。また、日照時間が短く暗いときに細かい作業を行うことができない。加えて、春の雪解け・解氷の時期は漁撈を控えるのでその分の時間をこうした作業に充てることができる。6月、7月になってしまうと漁撈に多くの時間を費やすうえに、気温が高く蚊が多くて屋外で鞣し作業がしづらい。鞣し作業後、さまざまな毛色と毛並みの毛皮を組み合わせる模様を作りながら縫製し、トナカイの脛の毛皮で細かい模様のアップリケやビーズ刺繍を縫い込んでいく。そして、日照時間が短くなってしまう秋までに衣服を縫う。森の中では、家庭用発電機をほぼ使用せず灯油ランプだけで過ごす人々もいる。衣服への装飾も昼の時間が長い時期でないと毛皮やビーズの色が分

15 両横に取っ手がついたスクレイパー（箭）で皮下結合組織を取り除くこと。本鞣しの段階でも行われるが、春の鞣しまで期間があるので、防腐のために行っておく。

16 動物の毛は生涯通じて同じものが生えているのではなく、周期的に生え換わっている。毛皮動物の多くは春先に出生し、初冬に冬用の毛になる。毛の密生具合、毛並み、色、艶は冬毛に生え換わった直後のものが最良とされる〔中村・西川 1977: 32-33〕。北ハンティの居住地では、他の毛皮動物の狩猟の時期に関して特別な決まりはないが、秋から春にかけて狩猟を行うことが多い。多くの理由があるが、そのひとつはこの毛皮の状態が良い換毛後に毛皮を獲得するためである。筆者の聞き取りによれば、夏にアカギツネの仔を生け捕りにした場合は、秋の換毛期まで育てた後に殺して毛皮を剥ぐ。そのあいだは家の近くにギツネを育てるための木製の囲いと小屋を作り、そこに住ませる。仔ギツネは早く人に馴れるので、ペットのように飼育できる。ギツネはイヌのように人間の子供たちと遊び、トナカイもギツネに慣れて怖がらなくなる。毛の成長周期がこの換毛に関係しているが、成長周期には三つのタイプがある。季節や性周期に左右されずに隣接した毛がそれぞれ独立した成長周期を持つモザイク型、年に一回または二回の換毛がある季節型、性周期の影響がみられる波型がある〔近藤ほか 2002: 3-4〕。

17 この点に関して、赤羽〔2015a, 2015b〕も「狩猟採集行動では、能動的に出かけて行って獲物を探し求めてこれを捕るというイメージが定着しがちであるが、罾を仕掛けてひたすら待つというのがハンティの実態」〔赤羽 2015a: 290〕であると、筆者と同様の見解を持っている。さらに彼は、狩猟採集の「内実は持続的に食が得られるシステムの基盤を生活空間のどこに頼っているかを明白にする必要がある」〔赤羽 2015a: 290〕とし、ハンティの場合、漁撈であれ狩猟であれ、罾がその食料確保システムの技術的基盤になっていると指摘している。

18 魚油の作り方は、脂が多い魚のウロコと頭を取り除き、屋外で鍋に入れて煮ただけである。ただし大量の魚を必要とし、また2日間かけて煮なければならない。魚油は食用でもあり、そのまま食べたり、ベリーを入れたり、パンにつけたりして食べる。都市部では健康食品とされ、市場等で小さなビンひとつを1,000ルーブルで販売している（聞き取り時、1ルーブル＝1.55円（公表仲値））。

からなくなってしまう作業しにくいいため、なるべく日照時間が短くならないうちに作業を終える。このように、他の生業との関わり合いや日照時間等の理由により、春こそ鞣し作業（箭打ち作業以降）を行うのに最適な季節となっているのである。

表2 ヌムトの生業カレンダー

月	平均気温	雪・氷	日照	移動	トナカイ牧畜	漁撈	狩猟	採集	その他
10	-2.3℃	初雪・根雪 川・湖凍結	20h 40min	移動	屠殺 雌の買い 付け	川氷凍結中漁撈困難 [年間で]川での釜漁・ 湖での刺網漁 (冬季は氷下刺網漁)	冬季の罝猟、 稀に銃猟(ク マ・クズリ・カ ワウソ・テン、 キツネ・リス・ ライチョウ等)		町の市場で魚・ ベリー・毛皮・ 土産物等の販売
11	-13.0℃			移動					
12	-18.8℃			移動					
1	-22.0℃			移動					
2	-20.9℃			移動					
3	-12.4℃	消雪・消氷	4h 30min	移動	出産 去勢 蚊遣火 (部分的牧柵) (頭数確認) 交尾	川氷溶解中撈困難 (舟の使用) 干魚・燻製魚作り 川・湖での釣魚	ガン・カモ銃猟 ハクチョウ銃猟	ベリー 採集	皮なめし ジャガイモ植付け 衣服縫製 家・牧柵等の建設・ 修理 ジャガイモ収穫
4	-4.6℃			移動					
5	3.2℃			移動					
6	11.8℃			移動					
7	16.9℃			移動					
8	13.3℃			移動					
9	7.2℃			移動					

出典：聞き取りデータにより筆者作成。ハンティの新年は初雪が降ったときに始まるため10月を行頭にした。平均気温はヌムトから西へ250キロメートルほど離れたカズィム村のデータである。

さらに、表のように季節によって変化する自然環境に合わせて行われる生業複合は、世帯内での男女分業によって担われている。毛皮に関する労働では、伝統的には屠畜と狩猟、剥皮は男性が行い、鞣し・縫製は女性が行う¹⁹。肉の解体も毛皮剥ぎも男性が行い、消化器系内臓の洗浄や肉の調理は女性が行う。生皮から鞣し、縫製の作業はすべて女性の領域になる。男性はまったく毛皮革の縫製等に関わらないのではなく、男性は毛を取り除いた革で橇の牽引具やキッスイ（後述）を結ぶ革紐、トナカイを捕らえる投げ縄、ベルト等、男性の仕事に必要な衣服と道具類を作る²⁰。かわって、女性たちは大量の縫物をしなければならない。家族分の衣服を縫い、装飾を施す。春・秋用、厳冬期用、仕事用、晴れ着というように、通常毛皮の衣服を一人当たり複数着所有している。トナカイ牧夫のブーツに至っては、一日ごとに乾かしつつ使用するので一人あたり四、五足は所有している。牧夫の妻たちは手が空きさえすれば絶えず縫物をしている²¹。

このように、女性たちが縫物をするためには、素材と時間、技術がなければならない。ハンティの冬季衣服が現在でも工業製品にすべてはとってかわらず、毛皮衣服文化が継続

19 コリャークにおいても毛皮の加工に関して同様に分業がみられる [cf. 呉人 2009: 247-248]。
20 筆者の調査時には、投げ縄以外の道具は現在ではトナカイの毛皮ではなく工場製の牛の革等を使用していることが多かった。
21 あるヌムトのハンティの男性（1950年代生まれ）は「ハンティは両腕を組むことを嫌う。そうしていると何も仕事ができないからだ」と言う。この場合の仕事とは縫物や道具類作りのことである。この男性の言葉は、ハンティ社会において働き者は良いとされており、常に何かしているのが理想だということを示している。

している理由のひとつには、以上のような複合的な生業形態と毛皮と魚等との地域的な交換関係、男女分業がある程度保たれているからということもあげることができる。

3-2 毛皮の外套とブーツ

それでは、実際にどのような毛皮衣服が着用されているのか、簡単にまとめる。冬用の毛皮の外套には二種類あり、女性用のサフ *сăх* (ロシア語でハラト *халат*) という前合わせの外套 (図2と6) と、男女とも着用するモルシヤン *молщяң* (シュルイシカル方言²²) あるいはモルシ *молщи* (カズィム方言²³)、ロシア語ではマーリツツァ *малица* と呼ばれる頭から被るフードつきの外套 (図2) がある。これらサフとマーリツツァ両方とも毛のある面を内側にして外側にフェルトか毛織物等を被せるか、あるいは二枚の毛皮を縫い合わせて両面に毛皮が出るように縫製する。サフには毛色の違う毛皮を縫い合わせて模様を作るほか、ビーズやフェルトなどで装飾を施す。ブーツは、腿まである長いもので、ハンティ語でヴェイ *Вэй* (ロシア語でキッスイ *кисы*) と呼ばれる (図3)。キッスイにはトナカイの足の毛皮を使用する。二重になっており内側のものは毛が中に出るようする。着用時には、干し草を中に敷き詰め、端を革紐で腰のベルトに結び、脛のあたりでひもで結んでキッスイを固定する。大きさ、色、毛並みを合わせるために、1足のキッスイを作るのにトナカイの足の毛皮8枚分、すなわち2頭分の足の毛皮を必要とする。

女性用の外套・サフにはトナカイの毛皮だけでなく、機能性・装飾性を活かしてさまざまな動物の毛皮が使用される。図7はヌムトに居住するある女性インフォーマントのサフの例である。耐久性・撥水性に優れたカワウソの毛皮を汚れやすく摩耗しやすい裾や袖の縁につける。この裾の部分は黒に近い色が美しいとされ、黒暗色のカワウソの毛皮あるいは黒っぽい毛色の夏の成獣トナカイの毛皮がふさわしいとされる。摩擦の多い手袋の部分にも雪が付きにくく丈夫なトナカイの足の毛皮を使用する。襟には肌触りが良く毛足が長くて目立つ暖かいキツネ等の毛皮を使用する。外套のライニングには柔らかく毛が短いコハクチョウの羽毛皮を使用し、厳冬期や風をうける櫓に乗る際には保温性の高いトナカイの毛皮を裏表両面に張る (図7右下)。あまり寒くない春と秋用のライニングには化学繊維のフェイクファーを使用することもある。このように、外套ひとつをとっても、秋冬春で区別されており、部分的にさまざまな毛皮が使用され、それぞれの毛皮の機能性や装飾性を十分に活かしている。

22 スィニヤの人々の言葉はシュルイシカル方言に分類される。

23 ヌムトの人々の言葉はカズィム方言に分類される。

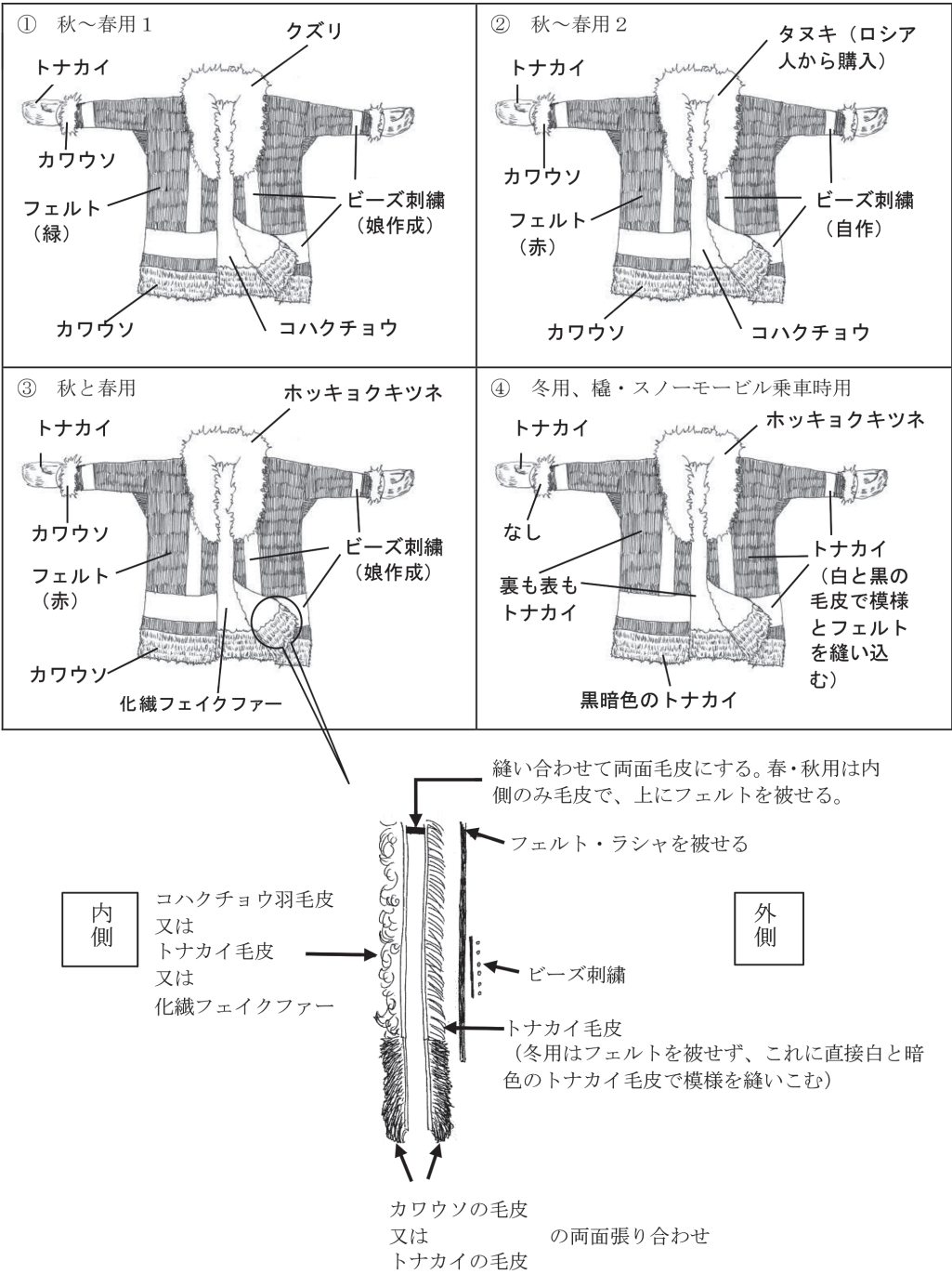


図7 Tさんが所有する4つのサフ 出典：筆者作成

4 トナカイ毛皮の衣服の審美性

4-1 トナカイの成長段階と毛皮衣服

前章までは、ハンティの毛皮利用の基本的特徴を機能性と装飾性、社会的背景の面から概観し、毛皮そのものの性質・それぞれの毛皮の特徴を活かして衣服を作成・使用している点、そして毛皮衣服作りは、狩猟から製作、着用に至るまで複合生業の生業層に埋め込まれた形で行われている点を確認した。次に、多様な家畜トナカイの毛皮利用の事例をあげ、トナカイ毛皮に対する審美および毛皮になったトナカイと人との関係について明らかにしていきたい。

衣服素材としてトナカイ毛皮が他の野生動物の毛皮と大きく異なるのは、野生動物の毛皮入手が不定期的であるのに対して家畜トナカイの毛皮はより安定しており、さらに望んだ色や毛並みの毛皮が手に入りやすい点である。それゆえ、ハンティにとってトナカイの毛皮は衣服として最も利用しやすい身近な素材となっている。それゆえ、冬季の衣服の中心である外套やブーツに使用してきた。まず、トナカイ毛皮の具体的な用法の事例から考察する。

家畜トナカイの毛皮は確実に手に入り、毛皮自体の大きさが大きいため、最も汎用性がある毛皮である。衣服以外にも、鞆、寝床の敷物、櫓や船の敷物、天幕、スキーマの裏張り等に使用する。トナカイの毛皮は丈夫で大きい、毛が折れやすく皮が重い。トナカイの毛が折れやすいのは、毛に油の詰まった空洞があり鞣しの過程でそれがとれてしまうと、毛がもろくなるためである [中村・西川 1977: 59]。トナカイ毛皮の外套を着たり敷物の上に寝転んだりすると体中に毛がついてしまう。それに加えて毛皮が厚く重いため、ファッションの素材としてキツネやイタチ科動物のように国内市場においても世界市場においても流通しなかった。しかし、森に暮らすハンティ等にとっては現在でも非常に重要な衣服素材のひとつであり、トナカイの生態を熟知して毛皮を剥ぎ、衣服を作って現在でも日常的に纏っている。一口にトナカイ毛皮と言っても、トナカイの成長段階や季節によって性質や状態が異なり、それぞれの毛皮に名称があり、それぞれに適した使用方法が考え出されてきた。表3はトナカイ毛皮の名称と用途の一例をまとめたものである。1960年代生まれのスイニャのハンティ女性からの聞き取りをもとに作成した。

表3 トナカイ毛皮の種類と用途の一例

毛皮の種類 ハンティ語名称	<i>mǎxti</i> (タフティ)	<i>понтǎхт</i> (ポンタフトゥ)	<i>пешка</i> (ペシュカ)	<i>пендок</i> (ペンドック)	<i>нєвўли</i> (ネヴリイ)
使用するトナカイの種類	冬の成獣	夏の成獣	出生直後	生後1か月	生後3か月 ～1年半
特徴	皮が厚い 毛色は多様	黒っぽい毛色	皮が小さく、 薄く、軽い	赤っぽい毛色	薄く柔らかく、 軽い 毛並み良し
用途の一例	天幕・櫓の敷物	毛皮の外套の 下の黒暗色部 分	子供のマーリ ツツァ、女性用 外套の頭巾	子供のマーリ ツツァ	女性用外套の 縦文様の間の 白い部分、子供 のマーリツツ ァーの身ごろ
					

出典：表は1970年代生まれのスイニヤのハンティ女性からの聞き取りをもとに筆者が作成した。写真は、左から4番目のものは2012年2月ヌムトにて、それ以外は2016年3月スイニヤにて筆者作成。

表3の右3列のように、子供や女性の衣服は、耐久性は劣るが軽く柔らかい仔トナカイの毛皮で作る。食肉生産を牧畜の主目的とすると、通常個体数を減らさないために仔トナカイはあまり殺さないが、トナカイ飼育数が一定以上の群れでは、必要があれば仔トナカイの屠畜を行うことは珍しくない²⁴。出生直後の毛皮は軽く柔らかいため、小さな子供用のマーリツツァの頭を覆う部分に使用することが多い。生後一か月の毛皮も子供のマーリツツァに使用する。トナカイの出産時期は4月終わりから5月であるため、生後一か月というのはちょうど春と夏のあいだの6月ということになる。そのため毛が夏に向けてだんだんと黒くなってゆく段階であり、毛色に赤味が出る。生後3か月（すなわち8月・9月）になると、この赤味がかった毛が黒くなる。トナカイ牧夫たちにとってこの生後3か月から生後一年半までの毛皮は最も価値が高く、子供のマーリツツァの身ごろや、白いものであれば女性の毛皮の外套の模様と模様のあいだの部分に使用する。対して男性用の衣服は成獣の毛皮を材料とすることが多い。加えて、トナカイの年齢だけでなく一年の季節

24 ツンドラとタイガの毛皮革文化を比較した齋藤玲子は、シベリアの毛皮革利用において「子供や女性には、幼獣の皮や鳥皮など、耐久性はないが柔らかな素材を使うといった事例がみられる」[齋藤1998: 71]と述べることから、珍しい事例ではないことが分かる。

によってもトナカイ毛皮の状態が大きく変わる²⁵。この表3の用途はほんの一例であり、他にもトナカイ毛皮のロング・ブーツ等にも成長段階による用途の範疇化がある。

以上のように、トナカイの成長段階と年間の換毛時期に合わせて屠畜と剥皮が行われている。牧夫たちは、食肉生産や役畜利用の点からだけでなく、どの仔トナカイの毛皮が欲しいかという点からもよく群れを観察し屠畜対象を選んでいる。トナカイ群の管理と毛皮衣服文化は関連しており、とくに仔トナカイをどの程度屠畜するかという点で特徴付けられる²⁶。表3のスイニャの事例では、農業企業での集団飼育のため一飼育班で1,500頭程度を飼育している。このインフォーマントのハンティ女性世帯の個人所有トナカイは約50頭である。再生産をして群れを維持できる最低限の個体数は60頭といわれているが、個人所有トナカイは飼育班に管理委託して群れと混ぜて飼育しているため、生後数年の仔トナカイを殺しても個体数の著しい減少につながりにくい。一方で、ヌムト地域は個人経営のため飼育数が60～120頭程度である。スイニャではマーリツツアの頭巾の部分に生後一年半までの仔トナカイの毛皮を使用するが、湖沼の多いヌムトではよく獲得できるカワウソ等の毛皮をこの部分に使用している。両者とも毛皮衣服の形状や見た目はよく似ているが、それを構成する毛皮は生業と深く関わっていることが分かる。

4-2 トナカイ毛皮衣服と人の関係

このようにそれぞれの成長段階におけるトナカイの毛の性質を熟知して衣服が作成されており、成長段階により範疇化された毛皮の物質的性質によって使い分けられている。しかし、各成長段階におけるグループだけではなく、生きているトナカイの個性も毛皮衣服文化を構成する要素となっている。つまり、生きていた頃の個別のトナカイの記憶が毛皮になってしまった後も残ることがある。筆者の調査では、インフォーマントたちがトナカイ毛皮のロング・ブーツ等や外套を見て、そのトナカイが生きていた頃のことやその仔トナカイを産んだ母トナカイを思い出し、語るということがあった。そのひとつの事例をあげる。

あるハンティ女性は、アフカの仔の毛皮で作ったマーリツツアを見ると、そのアフカのことを思い出すと言う。アフカ *авка* とは、赤子のときに虚弱で群れについて行けなかったため人間に餌を与えられて天幕内で育った、よく飼いなされたトナカイのことであ

25 これに関しては呉人恵による極東のコリャークの民族誌に詳しい。以下はその引用である。「12～2月の冬の毛皮は毛足が長くかつ皮が丈夫なため、衣類のみならず、夏用ユルトカバーや冬用のトナカイ毛皮製テントカバーの材料として用いられる。3月から4月にかけてのトナカイの毛皮は、毛がナイフで刈ったように切れており、冬のあいだに長く伸びた毛が抜け始め、なおかつ1月頃からわき始めた虫が食ってあちこちに小さい穴があき、皮が薄くなっている。敷布団や袋としては利用できるが、衣類には利用できない。5月から6月にかけては古い毛は抜け始めるが、新しい毛はまだ生え始めてはおらず、毛の長い部分と生えていない部分とで斑状態になっており、なおかつ皮が薄いため、一番利用価値が低いと考えられている。その後、7月から8月になると、古い毛が完全には抜け終わっていないが、新しく柔らかい毛が全体を覆うようになり、衣類としての利用価値が出てくる」〔呉人 2009: 249〕。

26 また齋藤も、トナカイを多頭数飼育するコリャークなどは、子供用の服に限らず幼獣皮を使うが、タイガの少頭数飼育を行ってきたツングース系の民族などは飼育トナカイを殺すことは稀とされていることをあげ、毛皮革の選択的な利用は生業と深い関係があると指摘している〔齋藤 1998: 72〕。

る。その毛皮になった仔トナカイとその母トナカイについて語ってくれた。彼女の夫は家畜医で通年トナカイ牧夫たちとともに遊牧しながら過ごしており、子供が幼い時期に数年間、彼女自身も一緒に遊牧について行った。そのとき宿営地にアフカがおり、子供や女性たちが世話をしていた。アフカは丈夫に育ったとしてもトナカイの群れに戻らずに、そのままずっと天幕のまわりで過ごすこともあるほど、トナカイよりも人に慣れてしまっている。しかし、あるとき、子供用の衣服を作るために一頭のアフカの仔を殺すことになった。

(中略) 次女がお腹にいたとき幼い長女を連れて夫についてウラル²⁷の方まで行った。あるときアフカの仔を殺すことになった。仔はまだ産まれたばかりのようだった。仔を亡き者にしたとき、母のアフカが天幕を離れずにずっとそのまわりをまわって鳴いていた。血の匂いで(自分の仔が死んだことが)分かったのだと思う。その母トナカイの両目の目頭から鼻筋にかけて涙が流れていて、自分もかわいそうと思って泣いてしまった。その仔の毛皮でマーリツァを作ったが、それを見るとときどき悲しかったことを思い出す。前足の毛皮二つは履物を縫うのに使ったけれど、残りの足の毛皮はまだあそこの倉庫の中に掛けてある。(スイニャのハンティ女性、1970年代生まれ)

アフカという人との関係が近いトナカイの毛皮だけでなく、トナカイ毛皮の衣服を見ると、誰が所有するどんなトナカイだったのか、誰からもらったのかなどをよく記憶している。通常ひとつの外套やロング・ブーツに複数のトナカイの毛皮を使用するが、それぞれの部分ごとにトナカイたちが生きていた頃のなどを思い出し、語ることがしばしばある。生涯トナカイ牧夫として働いた両親を持ち、自身も遊牧中の天幕の中で生まれたあるハンティ女性(1970年代生まれ)は、「母は自分が縫った毛皮衣服の素材となったトナカイのことをよく話していた。キッスイのこの部分の毛皮は、いつ屠畜したトナカイの毛皮か、誰からもらったトナカイの毛皮か、というようなことを語ってくれた」と言う。また、裁縫を担当する女性たちだけでなく、男性も自分の着ている毛皮衣服の素材となっている個々のトナカイについてよくわかっていると言う。

それに比べて、狩猟を行って獲得した野生動物の毛皮やその衣服についてもその動物が生きていた頃のことが語られるが、それは狩猟の瞬間のことに限られ、家畜トナカイほど具体的な動物の生涯が思い出されることはない。キツネやイタチやカワウソ等を捕らえ、鞣した毛皮を家の壁に掛けておき、来客がある度に誰が、どこで、どんな状況で仕留めたかというようなことが語られる。これは、自慢話でもあれば狩猟の情報交換でもあるが、その個体の生涯を語るものではない。このように、生身の動物が毛皮や毛皮の衣服になっ

27 この地域のトナカイ牧夫は年間約400kmの距離を移動する。夏季に標高が高く涼しいウラル山脈の上へ登り、初秋に山脈を越え、秋にまた同じルートで平地へ戻る。

た後も生きていた頃のことを想起される。牧畜を営む人々だからこそその家畜の毛皮衣服に対する価値や感情がある。これは他の野生毛皮動物とは異なる価値であり、家畜トナカイと人が共有する日常生活の時間・空間が野生動物よりも多く、より近い存在であることが、毛皮の衣服の語りの有無からも伺われる。

4-3 トナカイ毛皮衣服のコントラスト

このように家畜トナカイの毛皮は身近であり、個別のトナカイが毛皮衣服となった後も見分けられるほど、ハンティは毛皮それぞれの特徴をよく観察している。すでに述べた通り、トナカイの成長段階における毛皮の性質をうまく利用して衣服を製作し、家畜トナカイの毛皮は望んだ性質や色のものが手に入りやすいという点を利用して、作り手は比較的自由に細かく衣服に装飾を施している。そうした人工的に美しい模様を毛皮衣服のうえに表現する一方で、家畜トナカイそのものが持つ毛色や模様にも美しさを見出している。多様な毛色や模様が出現する家畜トナカイの毛皮の中で、ハンティがどのようなものを美しいとみなしているか、その審美について見ていく。

トナカイ牧夫やその妻たちにどんなトナカイ毛皮が最も美しく価値があるかを尋ねると、ハンティ語でハンシャン*ханшаң*と呼ばれる白地にところどころ黒っぽい色の模様があるもの、サマルートカ*самарутка*と呼ばれる白地に大きく黒っぽい色の模様があるもの、あるいはそれらの白黒が反転したものと答える。野生動物の毛皮が色や模様の変化に乏しいのに対して、家畜トナカイの毛皮の色は白～茶～黒暗色までさまざまであり、さらに個体の区別が可能なほど模様も変化に富んでいる。毛皮にはっきりとした模様が現れるのは家畜トナカイだけであり、野生トナカイの毛皮は一様に灰色のものばかりで模様もはっきり現れない。また、この地域のトナカイ以外の野生動物の毛皮は、同種では色や模様の変化が乏しい。それに対して、コントラストの強い白色と黒暗色で模様がはっきりと現れているハンシャンやサマルートカは、毛皮の中でもたいへん珍しく、目立つ。さらに、家畜トナカイの中でも二つとして同じ模様はないため、希少性が増す。これらの毛皮は、一番目立つように老若男女の毛皮の外套の表面の身ごろに使用される。

さらに、トナカイ毛皮の外套には白色と黒暗色のトナカイの脛の毛皮で模様を作り、アップリケのように縫い付ける（図2左、図3、図6右、図8）。コントラストがよく分かるようにより白い色とより黒に近い暗い色のトナカイの毛皮が重宝され²⁸、サフの裾の上の部分に使用される。より模様が際立つように現在では原色のフェルトでアップリケを縁取るように縫い込むこともある。「若い人は（トナカイ毛皮の外套に）模様をたくさんつけるけれども、模様がたくさんありすぎると、目移りしてしまって、かえって模様が目立

28 ラップランドのサーミを調査した葛野は、全体が白色でかかとだけ黒色の男性用晴れ靴における白と黒の配色の対称性が実際のトナカイの足にある斑点模様と同じようになっており、「トナカイのおしゃれを、そのまま写し取るように復元したもの」、そして「トナカイを生活の糧にしてきた民族ならではのデザイン」と、サーミの装飾に関する感性を紹介している [葛野 1990: 108-109]。ここでいう色の対称性とは意味合いが異なるかもしれないが、色の対照性が際立つように白地の毛皮に黒っぽい毛皮ではっきりと模様をつけていくという毛皮の色の組み合わせ方は似通っている。

たなくなってしまう」(スイニヤのハンティ女性、1950年代生まれ)と言うように、トナカイ毛皮が表に出ているサフやマーリツァは模様がはっきり際立っているものが装飾性の高いよいものとされる。また、「あまり白くない白色と薄めの茶色では模様は作らない。トナカイ牧夫の妻であれば好きな色や模様の毛皮を自由に選べて使用できるけれど、トナカイを持たずに親戚からもらっているだけの村の人は選べないからあまり白くない毛皮や灰色の毛皮を使うこともありうる」(スイニヤのハンティ女性、1960年代生まれ)と言うように、はっきりとしたコントラストの衣服を着用できるのは、飼育頭数の多い牧畜関係者の世帯の特別な利点だと考えられている。それほど強いコントラストのトナカイ毛皮衣服が良いものとみなされている。

また、家畜に限らず野生動物についても女性たちの多くはより白い色の毛皮を美しいとみなしている。例えば、「ホッキョクキツネの本当に白いものが美しい。ホッキョクキツネとアカキツネは帽子に使用する」(スイニヤのハンティ女性、1970年代生まれ)、「(白いけれど)ノウサギはすぐに毛が抜け落ちてしまうので、あまりいい毛皮ではない。(白い)オコジョがきれいだと思う」(スイニヤのハンティ女性、1960年代生まれ)と言うように、一口に白色といってもさまざまであり、より真っ白に近く丈夫な毛皮が好まれる。図8はトナカイの外套に真っ白なホッキョクキツネの襟をつけているが、その一部に白さを強調するように黒暗色のクズリの毛皮を縫い込んで飾っている。



図8 白色と暗色のトナカイ毛皮の対照
出典：2012年2月ヌムトにて筆者撮影

このように、天然の個別のトナカイのコントラストの強い模様に加え、アップリケで作る人工的な模様の装飾でも白色と黒暗色の強いコントラストが美しいとされている。各自

が好む模様はさまざまであり、どの動物の毛皮を好むかについても人それぞれであるが、天然／人工の模様や白色の白さを強調し目立たせるという点は、ハンティ等が持つ審美的感性として世代を超えて共有されている。

5 動物観と毛皮観

ハンティにとって動物は野生／家畜に限らず、肉・毛皮・労働力という物質資源としてだけでなく、観念上でも重要であり、神聖なものとしてみなされ扱われる。特定の動物がとくに神聖視されており、衣服としてまったく利用されないか、利用することをためらう。次に、特定の動物に対する動物観が毛皮衣服の利用に影響していることに関して、イヌ、ネコ、クマの事例をあげて考察していく。

ハンティは森の中であれ定住村であれ、必ずといっていいほどネコとイヌを飼っている。イヌはトナカイを追いつめる助けをする牧犬であり、同時に森の中で猟を行う助けをする猟犬でもある。対して、ネコは害獣のネズミをとる。両者の飼育の仕方や扱いは、イヌに牧畜と狩猟の仕事を仕込むことを除いて大差はない。しかし、イヌの毛皮とネコの毛皮に対する扱いには大きな差異がある。

まず、イヌの毛皮は質が良く、富の象徴であり、治癒機能もあるとされ、装うものとしては重宝されるが、実際にはあまり利用されていない。ソコロワは牧・猟犬は信頼し尊敬する仲間であるため、ハンティはイヌを食べないと考えられてきたとしている〔ソコロワ 1987: 54〕²⁹。筆者の聞き取りにおいても同様に、イヌを殺してはならないし食べてもならないということが確認できた。けれども、実際には毛皮を使用している事例は少なくない。あるスイニャのハンティ女性は、「イヌの毛皮は非常に暖かいから、白いイヌの毛皮をマーリツァの下の子の部分につけていた。マーリツァの下の子の部分はふつうトナカイ毛皮を使用する」と言い、イヌ毛皮の優れた防寒機能をあげていた。ハンティの居住地ではライカ犬が飼育されているが、この種類の毛皮は質が良く非常に暖かい。毛足の長いライカ犬の毛皮が裾の部分に使用されるのは、そこから風が入りにくくなり、足まで保温できるからである。

別のスイニャのハンティ女性（1960年代生まれ）の「祖父はトナカイを多く所有しており、たいへん豊かだった。白いトナカイ毛皮のマーリツァの下の子の部分に白い特別なイヌの毛皮を使っていた」と言うように、白いイヌの毛皮は富の証ともされている。牧夫への聞き取りによると、ハンティはイヌを自ら殺すことができないため、周辺に住むコミ人に頼んでイヌの毛皮を入手していた。コミ人から毛皮を何枚も買うことができるという点でも裕福さを示している。

さらに、イヌの毛皮は治癒力もあるとされている。例えば、あるスイニャのハンティ女性（1960年代生まれ）は、「イヌの毛皮は良い治療になる。兄が足を痛めたときにイヌの

29 シベリアでもイヌに対する態度はさまざまであり、エスキモー等では、イヌは人に近い動物とする認識から、他の動物とは異なる扱いを受け、イヌの毛皮を用いることはタブー視されることがある。一方でニブフやイテリメンはイヌを供儀に使用する〔齋藤 1998: 72-73〕。

白い毛皮でマーリツツアの裾の部分を作ったところ、治った。また、妹が腰痛のときにイヌの毛皮で腰あてを縫って渡し使ってもらったら、痛みがとれた」と言う。

このように、イヌの毛皮には防寒機能、富の象徴、治癒力が認められている。しかし、それでもイヌは神聖であり、殺してはならないとされており、これは彼らの文化の中では強い禁止事項となっている。住民の大多数がハンティであるオブゴルトという村では、飼主が手放してしまった野良イヌが多くいるが、それらを殺処分することをためらっているほどである。殺すことができない代わりに、この村では換毛期に抜け落ちた毛で毛糸を縫って靴下を作っている。それほどイヌの毛の防寒機能を高く評価しているが、神聖であるため殺すことがためらわれている。このように、機能面でも治癒力でも優れるイヌの毛皮を利用したいが、神聖な動物のため殺して積極的に利用できないという毛皮の物質的需要と動物観は矛盾がみられる。

かわって、クマはより神聖視されているが、利用に関して女性の禁忌を伴いつつも毛皮利用が一部許されている。北ハンティの居住地ではクマは身近に存在する動物であり、とくに遠くまで森に狩猟に行かなくても、夏にベリーを採集しに行った先でクマと遭遇することも珍しくないほどであり、その毛皮の獲得も稀ではない。クマの毛皮の毛は長く硬く密生して暖かいが、皮が硬くて重い、ファッション素材としては適さないため、世界的には敷物として利用されてきた。しかし、ハンティたちはクマの毛皮は衣服素材としてはおろか、敷物や皮革の道具類としてもほとんど利用してこなかった。神聖なものとして地上・床上ではなく、高足小屋や屋根裏等の高いところに保管される。

そのような神聖なものとして扱われるクマ毛皮でも二つの用途がある。ひとつは儀礼用・占い用の頭のはく製である。ハンティの大氏族は目と口が塞がれたクマの頭を家の中の高い棚の上に必ず置いており³⁰、クマ遊びの儀礼ではこのクマの頭のはく製が利用される。クマ遊びの本質は、神聖な動物であるクマを自分たちの集落へ招き、最大のおもてなしをした後、祖霊の国へ手厚く送り返すことにある〔星野 2015: 36〕。また、このクマの頭は空の世界と通じており宇宙の何についても知っていると考えられ、日常的にこのクマの頭を使用した占いを行う。かつてクマ遊びの儀礼には男性しか関与・参加できなかった³¹。もうひとつは、クマの体の毛で作ったトナカイ橇の牽引具である。これにも女性禁忌が伴い、「クマは男性であり、女性を誘惑するため、クマの毛皮の牽引具を使用した橇には女性は乗ってはいけない」（ヌムトのハンティ男性、1950 年代生まれ）³²とされている。

30 目と口を塞ぐ理由をロット＝ファルクは次のように説明している。死んだ動物からの報復を避けるために、このクマの頭部についても、人間を見つけないように貨幣で目を覆い、口を開かぬようシラカバ樹皮の帯で口をゆわえる〔ロット＝ファルク 1980: 165〕。

31 かつて女性はクマ遊びを行う天幕に近づくことさえも許されていなかった。現在では決められた場所でのみ見学が可能である。ただし、月経中の女性は天幕にも近づいてはならない。

32 筆者もこのクマの毛皮に関する禁忌を破ったことがある。筆者は現地において世帯調査などのために移動する際には、現地の方々にトナカイ橇やスノーモービルで送ってもらうように頼む。あるとき、ちょうど同じ方向へ行く男性がいたため、その方のトナカイ橇に乗せて行ってもらうように頼んだ。そのとき橇につながれていたトナカイにはクマの毛皮で作られた牽引具が取り付けられていたが、当時の筆者はそのことを知らずにその橇に乗ってしまった。後にその方の実姉から厳しく注意を受け、ストーブの火で浄化儀礼を行った。

る。牽引具だけでなくクマ毛皮の上自体に女性は乗ってはならないとされている。クマの毛皮に触ってはならないという禁忌はないが、それでもあるハンティ女性（1970 年生まれ）は、「クマの毛皮に触るのすら怖い」と言い、毛皮に対しても強く畏怖を感じていた。このように、クマを殺して、儀礼を行い霊を送り返した後の毛皮でもその神聖性が継続し、占いに使用されたり、男性であるクマに対してとくに女性禁忌が強く表れたりする。

かわって、イヌやクマが神聖であるにも関わらず一部利用されるのに対して、ネコの毛皮利用は一切禁じられている。北ハンティではネコについては毛皮利用だけでなく、殺すことも許されていない。北ハンティのあいだではカズィム川という川を創造したとされる女神信仰が強いが、その女神は黒ネコの姿をしている [Бауло 2005: 16]。そのため、ネコは神とみなされ、ペットのように飼育しているものの大変神聖な動物として扱われている³³。「ネコはハンティにとって神であり、決して殺してはいけない。ネコが年老いて死に近づいてきたら、ネコは自分で森に去ってしまうか、または近所のコミの方などに引き取ってもらう」³⁴（ハンティ女性、1970 年代生まれ）と言うように、殺すことはおろか自宅で死なせてしまうことも禁じられている。そして、「もし偶然意図せずネコを殺してしまったら、カズィム川の岬に行って供物をささげて儀礼をしなければならない」（スイニャのハンティ女性、1960 年代生まれ）と言うように、女神伝説の舞台となった現実存在する場所に実際に行き儀礼をせねばならない。

このように、それぞれの動物は個別に神聖視されており、その神聖性は毛皮になった後もそれぞれの性格をもって継続している。まず、世界観のうえで最も神聖であるのはクマであるが、実際に神聖性が最も強く作用しているのはネコである。多くの毛皮動物の利用の中でネコ毛皮のみ男女ともに使用が禁じられている。リスの例のように、そもそも薄くて小さいという点でもネコの毛皮の利用優先順位は低い。ここには、小長谷有紀が言うように、シベリア狩猟民の狩猟あるいはモンゴル遊牧民の屠殺においてしばしば摂食タブー等に援用される思考方法、すなわち「あらかじめ一部を禁じておくことによって他の大部分を免除するという構造」[小長谷 2002: iii] が同様に働いていると考えられる。つまり、あまり利用価値のないネコを神聖化し、殺しと利用を禁じることで、その他多くの毛皮動物の利用を可能にしている。それに対して、北ハンティの世界観上最も神聖であるはずのクマの肉と毛皮利用はすべてではなく、女性の利用を含め一部だけが禁止されている。この場合は、クマ全体の一部を禁じてその他の利用価値のあるクマ肉などの大部分の利用を可能にしているのである。クマはクマ遊びという儀礼の際には、クマを殺したことについ

33 ネコの神聖性に関しては、その不思議な行動に表れていると言う者もいる。例えば、「以前飼っていたネコが夜中に家の中でうなり声をあげながらくると歩き回っていた。夫は宿営地に行ってしまったので、小さな子供二人と私だけだったのでたいへん怖かった。そしてあるときから、ネコの姿が見えなくても、うなり声が聞こえだし、気配を感じるようになった。その後ネコはどこかへ去ってしまったらしく、一切姿が見えなくなった。ネコは神聖だからこういうことが起こるのだと思った」（ハンティ女性、1970 年代生まれ）。

34 コミはコミ共和国を中心にウラル山脈北部東側から西側にかけて居住する少数民族である。ハンティと一部居住地が重なるが、異なる文化体系を持つ。

てたくさんのさまざまな言い訳をし、クマ肉を共食するときには通常人間が食べるのではなく、鳥の鳴き声を真似て鳥が食べるのだということにし、クマに向かって言うべきでないようなののしり言葉をクマ肉に浴びせかける。これはクマの神聖性が、肉や毛皮の高い利用価値に反しているからと考えられる。こうしたタブーの多くは、西シベリアのハンティを含めた北方諸族のカワカマスに対する摂食タブーに関しても同様の論理がみられるように〔吉田 2002〕、食に関して表れるが、ここでは世界観や神話と深く結びついて毛皮利用にも表れている。

6 おわりに

西シベリアの北方諸民族のあいだでは、工場製の防寒着にとってかわらず、比較的毛皮衣服を着用する者が多い。本稿は、ハンティの事例を挙げ、彼らの防寒機能以外の毛皮衣服選択の理由を考察するために、第一に、彼らの生業複合における毛皮利用の特徴を明らかにし、第二に、毛皮になったトナカイと人との関係およびトナカイ毛皮の審美性について考察し、第三に、神聖な動物の毛皮利用の事例を検証した。この結果、以下のことを確認できた。

ひとつ目に、彼らの居住する地域の自然環境の中では毛皮の防寒機能や毛皮そのものの性質が毛皮衣服の選択の大きな理由になっていることを再確認した。2章と3章で示したように、耐久性や肌触り、重さ、装飾性等の物質的性質を総合して、それらを十分に活かし、帽子、襟、ブーツの部分に配置している。そうした多様な毛皮衣服文化を成り立たせているのは、トナカイ牧畜、狩猟、漁撈の生業複合であり、その生業暦と世帯内分業に組み込まれた形で毛皮衣服の作成も行われている。遊牧世帯、定住村世帯間の毛皮素材の交換関係も彼らの毛皮衣服文化を成り立たせている一要因であることが分かった。

二つ目に、トナカイ毛皮衣服については作り手の個人的な好みや工夫は模様等に表れ、それらを際立たせることができるように、白色と黒暗色のコントラストがはっきりと表れる配色に審美性を見出していることが確認できた。天然の模様であれ、人工の模様であれ、トナカイ毛皮衣服は、はっきりと模様が際立ったものが良いものとされている。家畜トナカイの場合、野生動物と異なり、成長段階や換毛期で異なる性質の毛皮をある程度計画的に入手可能なため、外套やブーツの装飾にも繊細さが増す。そのため、外套やブーツのどの部分にどの成長段階、どの色のトナカイ毛皮を使用するかということが、トナカイ毛皮衣服の美しさを左右する。トナカイを多く飼育する世帯は比較的自由に選び取ることができ、より美しく装うことができる。その点でも世帯や地域の牧畜形態が毛皮衣服の装いと深く結びついているといえる。

三つ目に、毛皮は単なる物質としての衣服素材ではなく、ハンティ等の精神世界とのつながりを持つものだという事も確認できた。動物は彼らにとって神聖であり、その神聖性は毛皮になった後も連続している。神聖であるが利用したいという矛盾を緩和するように、クマやネコ、イヌの毛皮は、それぞれその利用の一部を禁じて他の大部分の利用を許すという思考方法が確認できた。イヌとクマは毛皮としても利用価値が高いが神聖である

ため、その一部を禁じて利用することを可能にしている。対してネコは毛皮の利用価値が低いので完全に利用を禁じて、その他の種類の動物の利用を可能にしている。

以上のように、ハンティ等の毛皮衣服はソ連崩壊の影響を受けて使用する毛皮の種類などが変化してきたものの、毛皮の機能性の重視やコントラストという審美性の根幹は生業活動や動物観と深く関わり形成され継承されていることが分かった。しかし、本稿ではこうした審美性がいつ形成され現在に至っているのかまでは詳しく考察できなかった。ハンティの毛皮利用については、隣接して居住する民族集団であるネネツやコミからの影響が大きい。トナカイの飼育を開始する15世紀くらいまでは、魚皮と野生動物の毛皮を主として使用していたところ、それだけでは足りなくなり、家畜トナカイの毛皮で補っていたと考えられている〔斎藤 1966: 156〕。ハンティの魚皮から毛皮衣服への変容過程の考察については今後の課題としたい。

<参考文献>

- 赤羽正春 2015a 「トナカイ放牧基地・ストーイビシェの生活」星野紘・斎藤君子・赤羽正春編『神々と精霊の国——西シベリアの民俗と芸能』国書刊行会、pp.277-302。
- 2015b 「狩猟・採取・移動の技術」星野紘・斎藤君子・赤羽正春編『神々と精霊の国——西シベリアの民俗と芸能』国書刊行会、pp.303-333。
- 大石侑香 2014 「西シベリア・タイガ地帯北部におけるトナカイ飼育の脱集団化過程と複合的生業の現在」、『北海道立北方民族博物館研究紀要』（北海道立北方民族博物館）23: 1-21。
- 奥村章 2013 「天然毛皮の概要」『繊維機械学会誌』66(12): 729-741。
- 葛野浩昭 1990 『トナカイの社会誌——北緯70度の放牧者たち』河合出版。
- 呉人恵 2009 『コリャーク言語民族誌』北海道大学出版会。
- 小長谷有紀 2002 「はじめに——北アジアにおける人と動物のあいだをめぐる」小長谷有紀編『北アジアにおける人と動物のあいだ』東方書店、pp.i-vii。
- 近藤敬治 1998 「毛皮の種類」『皮革科学』44(3): 171-177。
- 近藤敬治・二宮嘉健・市川秀雄・加藤克・清水祥夫 2002 「毛皮の多様性」『皮革科学』48(1): 1-5。
- 斎藤君子 2015 「熊祭り」星野紘・斎藤君子・赤羽正春編『神々と精霊の国——西シベリアの民俗と芸能』国書刊行会、pp.35-45。
- 斎藤晨二 1966 「シベリアの狩猟・漁撈民とトナカイ飼育」『史林』49(5): 139-163。
- 斎藤玲子 1998 「極北地域における毛皮革の利用と技術」『北海道立北方民族博物館研究紀要』7: 69-92。
- 佐々木史郎 1994 「皮・革製品」石川栄吉ほか編『〔縮刷版〕文化人類学事典』弘文堂、p.180。
- ソコロフ、ゾーヤ 1987(1981) 『シベリア民族誌——北の大地に生きる』本荘よし子訳、国際文化出版社。
- 中村喜代次・西川勢津子 1977 『毛皮の本』文化出版局。

- 西村三郎 2003 『毛皮と人間の歴史』紀伊國屋書店。
- ロット＝ファルク、エベリーヌ 1980(1953)『シベリアの狩猟儀礼』田中克彦訳、弘文堂。
- 山田孝子 2007 「文化復興から読む宗教と自然の意味——ハンティ、サハの事例から」
煎本孝・山岸俊男編『現代文化人類学の課題——北方研究からみる』世界思想社、pp. 203-230。
- 吉田睦 2002 「シベリア先住民における魚の禁忌と聖性」小長谷有紀編『北アジアにおける人と動物のあいだ』東方書店、pp. 43-71。

Balzer, Marjorie Mandelstam 1999 *The Tenacity of Ethnicity: A Siberian Saga in Global Perspective*. Princeton: Princeton University Press.

Prokof'yeva, Ekaterina Dmitrievna, Valerii Nikolaevich Chernetsov & Natal'ia Fedrovna Prytkova 1964(1956) "The Khanty and Mansi" in Maksim Grigor'evich. Levin and Leonid Pavlovich Potapov ed., *Peoples of Siberia*. Chicago and London: The University of Chicago Press, pp. 511-545.

ロシア語

- Аксянова, Галина Андреевна, Аркадий Викторович Бауло, Статьи Елены Перевалова, Эстер Рутткай-Миклиан, Зоя Петровна Соколова, Галина Евлампьевна Солдатова, Надежда Михайловна Талигина, Елена Ильинична Тыликова, Наталья Викторовна Федрова 2005 *Сынские Ханты*. Новосибирск: Института археологии и этнографии СО РАН.
- Бауло, Аркадий Викторович 2005 «Религиозно-мифологические представления казымских хантов.» Ред.-сост. Лариса Степанова Андриенко. *Легенды Казыма: Культовая атрибутика казымских хантов в фондах Государственного музея Природы и Человека.*—Ханты-Мансийск: Полиграфист.
- Богордаева, Аксана Александровна 2005 *Традиционный костюм обских угров*. Санкт-Петербург.
- Иванов, Сергей Васильевич 1963 «Орнамент народов Сибири, как исторический источник (по материалам XIX? начала XX в.)». *Народы Севера и Дальнего Востока*. М.-Л.: АН СССР.
- Соколова, Зоя Петровна 2009 *Ханты и манси: взгляд из XXI в.*—Москва: Наука.

インターネット資料

Союз Пушнина <http://www.sojuzpushnina.ru> 2016 年 11 月 10 日閲覧。

Peeling the Pelt of Animals and Covering the Body with Fur: the Aesthetics and Sacredness of Fur Wearing in Northern Khanty

Yuka OISHI

Keywords: fur, Khanty, dressing, attitudes toward animals, subsistence complex

This paper examines the reason why Northern Khanty, who live in the Taiga area of Western Siberia, actively choose to wear fur even when it's not for the function of protection against the cold, based on the author's fieldwork data. There are many ethnographical studies about fur clothes of the Khanty, but they focus on the classification of ornaments of the clothes or the techniques of sawing and have not really discussed the mentality and sensibility in which people peel the pelt of animals and put the fur on their body. This paper also considers the differences in attitudes of how to dress and deal with the furs of several animals which were obtained in hunting and breeding, and what it means in their life-world. First, it situates fur-use within subsistence complex and gender division of work. Second, it shows the aesthetics of reindeer fur and relationships between individuals and their individual reindeer furs. Third, it considers the differences and consistencies among senses of value and behaviors toward particular sacred animals and their furs.

As a result, the following three points have been ascertained as three reasons to choose fur, which are not for the function of protection. One is that the making and using of fur clothes are embedded in their subsistence complex, gender division of work, and local exchanges of furs. The second reason is that they find an aesthetics in the strong contrast of white color and dark color to accent the natural and artificial ornaments in reindeer fur clothes. The third reason is that animals continue to be sacred even after the animal has died and been used for its fur, and there is a method of thinking to ease the contradiction of wanting to use fur even though it is sacred in which particular sacred furs can be used when some parts of them are forbidden to be used.